

戦場のヴァルキュリア
?? おひげのホワイガ
トドル ロラン とガ
リアと月の蝶のおとぎ
話

溶けない氷

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地球と月の不毛な戦争が終わり、秋を迎え、冬を越し、春の前に

月の女王 デイアナ・ソレルはその長い長い旅路を終えた。

湖畔の小屋で一人となったロラン・・・

だが末神SYSTEM|V99

アメリカ大陸で繭に包まれた機体のシステムは確実に地球の「敵」を探知し続けた。
た。

無人のコックピットに文字が浮かび上がる・・・

「V i s d e t e c t e d (Vを探知)」

〔Activating Program Anti V (対Vプログラムを起動)〕

〔Transferring Main Pilot (メインパイロットを転送中)〕

〔Teleporting to nearest DOC base (直近のDO

Cベースへテレポーション開始)〕

アメリカ大陸の東、海を挟んだ大陸、アメリカ側での呼称はガリア。

彼ら自身はヨーロッパと呼ぶ大陸での征歴1935年

第二次ヨーロッパ大戦が起きようとしていた。

目次

おとぎ話 ダルクスと蝶の天使様

1

第1話	おひげと少女	6
第2話	おひげと戦争	13
第3話	おひげと第7小隊	21
第4話	おひげと橋	29
第5話	おひげと春の嵐	41
第6話	おひげと新聞	51
第7話	おひげと森	64

おとぎ話 ダルクスと蝶の天使様

戦場のヴァルキュリア ?? おひげのホワイトドール

昔々、私たちダルクス人はそれはそれは豊かな恵みの溢れる大地「恵みの園」と呼ばれるところに住んでいました。

けれどもある時、神様が絶対に開けてはいけなとおっしゃった宝箱の蓋をダルクス人は開けてしまったのです。

箱には悪霊が封印されていたのです。

そんなものの手の届くところに置いとくなよとか、鍵くらいしっかり掛けとけとか突っ込んででも仕方ありません、おとぎ話なのですから。

封印の箱から飛び出た悪霊たちは99日もの間大地を荒らし周り、

美しい恵みの園も森もすっかり荒れ果て焼けてしまいました。

この様を見た神様は大層お怒りになり、天上から蒼の天使ヴァルキュリア達をお遣わしになりました。

99日間も自分の庭を荒らされて気づかなかった神様も大概ですけどね。

悪霊たちと蒼の天使ヴァルキュリア達は地上で大戦争をしました。

文字通り凄い大戦争です、地は裂け 海は干上がり 天空は真つ暗になってしまい雷がそこらじゅうで鳴り響いています。

ところで神様、被害がむしろ拡大してるような気がするんですが。

さて、自分たちが住んでいるところでこんな大戦争をされたらダルクス人はたまつたもんじゃありませんよね、いくら自分達の蒔いた種だとはいえあんまりです。

ダルクス人達は神様にこうお願いしました

「私たちを守ってくれる天使様を新しく遣わしてください、ヴァルキュリア達は私たちが気にかけてくださりませんので。

新しい天使様についてに大地を蘇らせていただければもつと良いのですが。」

なんとも虫のいい話です、でもそこらへんは神様なのでダルクス人達のお願いを聞き届けて新しい天使様を遣わしました。

新しい天使様は巨人でした、身の丈がダルクスの男の10倍はあろうかという巨人数です。

しかも白い鎧に身を包み、光る蝶の羽を持っておられました。ご丁寧にご立派なお髭までつけています。

ここまでくればもう立派な天使です、疑いの余地はありませんよね。

天使というと鳥の羽を生やしているものだった？でも蝶の羽の方が綺麗ですよね!?

(逆ギレ)

さて蝶の羽持つ天使様は大地を荒らしまわる悪霊たちとヴァルキュリア達にこう仰られました。「この地は彼らダルクス人の大地、争う者たちよここより去れ。さもなければ我が光の剣と矢にて汝らを悉く討ち滅ぼさん。」

なんとという物々しく神々しい仰られ方、さすがは一人で最後に登場された真打の天使様です。

そんなお方の言葉を耳にして悪霊たちとヴァルキュリア達は恐れをなして退散……はしませんでした。

むしろ「やれるもんならやってみろ。」とばかりに蝶の天使様にも襲いかかってきます。

無茶苦茶です。

悪霊VSヴァルキュリアVS蝶の天使様 のファイナルファイトです、場外乱闘です。

戦いはさらに続き、最後には悪霊たちもヴァルキュリア達もすっかりへとへとになってどこかに身を隠してしまいました。

蝶の天使様もこの戦いで傷つき、その傷を癒すために天へとお帰りになられたのです。

でも去り際にこう仰られました

「哀れなダルクスの子らよ、私は天に帰る。だが汝らとその子らのためにこの荒れ果てた大地を我が月の蝶によつて少しなりとも癒そう。」

そしてその大きな大きな蝶の羽をおひろげになつて大地を包むと、荒れ果てた大地には緑が蘇り川には清水が流れ始めたのです。

「これにて我が力はすべて尽きた。だがダルクスの子らよ、いつの日にか私は復活する。そして汝らの前に真のダルクスの王と巫女らと共に姿を現し地に平和を人に安らぎをもたらそう。」

こうして蝶の天使様は天上へとお帰りになられたのです。

ですが良いことばかりではありません、地上に残つたヴァルクユリア達はダルクスを責めます

「お前たちの邪な欲望のために地上が焼かれたのだ、報いを受けるが良い！」

被害を拡大させた自分たちの責任は棚に上げてこれです、理不尽といえは理不尽です。

こうして私たちダルクス人は今に至るまでヨーロッパの他の人たちから大地を邪法で焼いた民族として迫害されるようになったのです。

ですが希望はあります。

いつの日にか、蝶の天使様が私たちの前に再びそのお姿を表す日が……

書き込みがある……『ヴァルクキュリア信徒の一般的な伝承からはかけ離れている上にヴァルクキュリアにも大地を焼いた責任があるとしているため、この話は決して非ダルクス人には知られてはならない。ダルクス人達への迫害を加速させる恐れが……』

イサラの書庫にあつた粗末な紙に印刷された本より

第1話 おひげと少女

「アリシアお嬢さん、オーブンの修理終わりましたよ。」

「あら、ロラン。さすがに早いわね、丁度お茶も入ったところだから休んでいったら？」

「それじゃ、お言葉に甘えさせていただきます。」

「ロランさん、これ今度私の設計した飛行機械の図面なんですけど見てくれませんか？」

「いいですよ、イサラお嬢さん。へえ、初めての飛行機にしてはよくできてますよ。」

「ここの翼端角を変えてみれば……」

アリシアのパン屋、まるで昔からの馴染みのようなアリシア・イサラ・ロラン。

時系列は1ヶ月程度遡る……

かの女王が長い旅路を終え、地球で永遠の眠りに就いた頃……

今や一人となったロランは思い出すように忘れがたい相棒、

ホワイトドールのマニユアルを

取り出して見ていた。

何となく今までの不思議な旅路を振り返ってみたくなったのだ。

「本当に信じられないようなことばっかりだったよなあ。」

「ターンエーでも新しい時代を拓ける、か。」

納得したようにサイドクロゼットへマニュアルをしまい込み床に就く。

「おやすみなさい、ディアナ様……」

ロランは気づいていなかった。

クロゼットの中のマニュアルの表面に突然表示された文字列に……

[ALARM ALARM EMERGENCY SITUATION]

[EMERGENCY TRANSFERRING MAIN PILOT]

突然、ベッドの中のロランを緑色の蛍火のような光が包み……

なぜ、人間のロランからサイコフレームの光があふれ出したのか？

ターンシリーズのパイロットは本人も気づかないうちに

ナノマシンで強化人間にでもされてたんじやないんだろうか？

光が消えたときにはロランも消えていた。

そうやってロランは……アメリカ大陸より消えた……

かなり強引な呼び出しだが、黒歴史時代のパイロットの労働環境は

休暇中でも突然前触れもなく戦場に放り込まれる程酷かったのかと心配になる呼び

出し方だ。

「う……」

ロランがまるで二日酔いの後のような気分で目を覚ますと、

自分がホワイトドールのコックピットに座っていることに気づいて仰天する

「えええええ！」

ほっぺをつねってみるが……

「夢じゃないんだ……それにしてもここは」

それにしてもこの主人公、反応がべたである。

周りを見渡してみても真っ暗で何も見えないと思うと

ホワイトドールの暗視装置が作動する。

「ここは？ ヴイシニテイの地下？ でもちよつと違う？」

周りには恐らく黒歴史時代の武器が並べられ、

ホワイトドールは丁度格納庫のような場所に立っている……

格納庫のようなという表現を使うには理由がある。

数千年、あるいは数万年もの時を経たDOCベースはとうの昔にエネルギー供給が

き

モスボールに必要なナノマシンを保持できなかつたのであろう。

施設のほとんどは土に埋もれ天井からは鍾乳管が垂れ下がり武器はことごとく

武器の形を辛うじて保つだけの埃の塊となっている。

「一体なんでこんなところに……とにかく出よう。」

ロランは機体を出口を探す、

こういうときにはホワイトドールの高性能な光増幅装置が役に立つ。

たちまちのうちに外から漏れ出てくるかすかな光を検出し、

そこがDOCベースの出口……今はもうほとんど土に覆われた洞窟の入り口といったほうが良いだろうが

……を見つけ出す。

「よかった、完全に土の中ってわけじゃないんだな……ん？これは……」

センサーが格納庫の前、MSデッキの配置が黒歴史時代も

UCと基本的に変わらないと仮定すると

整備用端末の位置にあるトランクケース程の大きさの『ある物体』を検出する……
「なんだろう……蛍みたいな光りかたをするなんて。コンピュータ……にしては」

ロランがそう呟くとホワイトドールはオートでその『金属塊』を手に取り、胸の中に収容した。

「えええ！な、なにをしてんだよホワイトドール！拾ったものを簡単にポケットに入れるなよ！」

ところでロラン、金属塊どころか核弾頭を収納してた君はあんまり人のことを言えないぞ。

ロランが知るはずもない．．．その金属塊が遙か昔、

魂を表現する金属サイコフレームと呼ばれていたことなど．．．

キロ単価が一時は黄金の20倍にも達した恐ろしく貴重な品だということも。

「とにかくまずは早くここから出ないと。ここ、なんだか息苦しいや。」

ロラン、そういう台詞はなぜかわからないが不吉だからやめようね。

．．．．．

その後、DOCベース（の残骸）から土を掘り進んで無理やり出たロランは辺りを見渡して困惑する。

「(い)．．．どこだろう。」

森の中．．．人の気配もない．．．初めての土地は人里遠い．．．これがムーンレイスの宿命か。

「時間もわかんないし．．．とりあえず近くの人里まで行ってみるか。」

不安にかられながらもロランはどこかまるで初めて地球に降り立った時

人里を探して自分の足で緑なす地球の大地を歩き始めた時のことを思い出してワクワクしていた。

．．．まあその後は狼に襲われたり御曹司に見初められたり、

川で溺れたりでもキエルお嬢さんとソシエお嬢さんの御神体を拝ませてもらおう
ラッキーすけべつぷりを発揮したわけだから、

この胸の高まりもあながち間違ってもいない。

そしてロランは歩き出した、ホワイトドールの足で

モビルスーツなんてもう珍しくない、そういう判断からくる横着ぶりである。

まあ実際、着替えなし・道具無しのこの状態ではホワイトドールを使うしかないんだ
が。

．．．．

「はあ．．．」

道の端で立ち往生するトラックを前にして油まみれ泥まみれの少女、

イサラ・ギウンターは盛大に溜息をつく。

トラックは致命的な故障でもしたのかピクリともしない。

「クラंकシャフトが折れるなんて．．．」

そればかりはいくら優秀な整備士でもパーツがないことにはどうしようもない．．．

が、最近では帝国と連邦の東西緊張の影響か質のいい自動車部品は市場から消えつつあ
る

少女は大きな町からブルールに必要な様々な機械部品を調達して戻ってくるどころだったのだが

この通り人里離れた田舎道で立ち往生してしまったのだ。

「やっぱり・・歩いて助けを呼びに行くしかないのかなあ・・」

助けを呼びたくない理由は彼女の髪と瞳の色・・ヨーロッパの被差別民族ダルクスだということにある。

都会や連邦に近い街ならいざ知らずガリアでは差別がいまだに根強い。

助けを呼びに行っても無視されるならまだ良し、悪ければ石もて追い返されることすらよくある

決心がつかず道端の岩の上にぼつんと小動物のように座っている彼女の元に

まるで神話を再現でもしようという神の計らいか・・大地を響かせる足音をたててなんだろうかとキョロキョロと周りを

首をハムスターでも連想させるようにせわしくふっている彼女の元へ

ホワイトドールが現れたのは

「あの一お手伝いしましょうか」

神話の再現にしてはやたら腰の低い話し方だが。

第2話 おひげと戦争

「それで、ロランさんがホワイトドールでトラックを運んでくれてすごく助かったんですよ。」

「それにこの前ホワイトドールを運転させてくれたときなんかですわ……」

「あーはいはい、ご馳走様。イサラのノロケ話ならもうお腹一杯よ。」

「はあ、私にもいい人現れないかしら。」

「こういう風に盛り上がれるのが女二人のいいところだろう。」

「この場にロランがいたら『ふえ？そ、そんな 僕とイサラお嬢さんはそういうんじゃないよ！』」

「とこの三人の中で一番ヒロインっぽく女子力の高いリアクションを返したであろう。」

「御曹司がときめくはずである。」

「『そういうえば肝心のそのロランは今どこにいるの？』」

「あ、ロランさんは今ホワイトドールで国道の橋の撤去作業に行ってるどころなんです」

「ガリアに到着したロランはこの一ヶ月西に東に
橋の修理、風車の修理、建物の建築に解体、道路の整備、逃げた豚の搜索、鉱山開発

酔っ払いの喧嘩の仲裁、堤防の修理とかとか……と、毎日忙しく働いていた。ホワイトドールで

ロラン曰く、「ホワイトドールって見た目より器用だから。」だが

まさかイサラもここまで器用で汎用性がある機械だとは思ってもいなかったので
技師としてホワイトドールには興味津々だったのが周囲はそれを

『イサラはロランに恋してる』

としか受け止めなかったのだ。

まあ半ばあつてるようなものだし別にいいだろう。

結論としてはイサラがホワイトドールのことをロランに聞いたり調べたりしても

(ロランはなるべく月光蝶や戦争のことについては省き、詳しく説明したが

I F B D (Iフィールドビームドライブ) 「D H G C P」(不連続超振動ゲージ場縮退

炉)

などガリアどころか今の地球・月でもロストテクノロジータクナ技術など分かるはずもない。)
わかったのはガリアどころかヨーロッパの技術水準を

はるかにしのぐ精密な機械というだけで

イサラは毎日ロランから手渡されたマニュアルとにらめっこをしている。

ロランは自分のことをアメリカ出身の技師で

自分のホワイトドールで世界探検旅行をしていたら

道に迷ってガリアに来たという恐ろしく苦しい訳をしていたが……

まあガリア義勇軍にはなぜか他の大陸や外国人までもが所属しているので

そういうところわりといい加減なこの国のお国柄が幸いしたのかもしれない。

ヨーロッパ人にとってまず重要なのはその人物がダルクス人かであつて

どうみてもロランがダルクスでないのも幸いしたのだろう。

話は戻る……

「そう、橋の撤去作業にね……」

撤去といえば聞こえはいいが、つまり戦争に備えて橋を破壊するということである。

アリシアもロランはこの一ヶ月ですっかり親しくなつたから知っているが

ロランはそういう戦争や人を不幸にすることにつながることにホワイトドールを

使うのを極端に嫌うのだ。

それでも依頼を受けたのは……

(イサラの為……でしようね。あの子そういうとこ一途だから)

依頼主は軍……ダルクス嫌いの急先鋒にイサラの家に間借りしているロランが

この依頼を断つてなんらかの嫌がらせを受けることを心配して受けたのだというこ

とは

容易に想像がつく。

みればアリシアも義勇軍の制服、いくさ来る……である。

「じゃあ私もそろそろ周辺のパトロールにいくからイサラも疎開の準備を進めておいてね。」

「はい、アリシアさんもお気をつけて。」

そういつて出て行くアリシア。

一人になったイサラは

（戦争が始まって、疎開することになって……ロランさんもどっか行っちゃうのかなあ……）

と沈んでいたが……

その頃ロランは

「支柱の除去が終わりましたから、爆破します。下がってください」

見れば頑丈そうな鉄骨の橋の解体作業もようやく終わったところだった。

結構な時間がかかってしまったが、MS無しでは帝国の進行前に作業を終えるなど不可能だったろう。

「ご苦労だったな、こいつが約束の金だ。」

とやたら横柄な士官が仕事を終えホワイトドールから降りてきたロランに報酬を渡

す。

正直、これほどの大仕事には少ないと思えるが……

軍の依頼であることを考えれば断りにくいのもあるし、

ホワイトドールがほぼメンテナンスフリー・燃料不要であるという

いんちきじみたお財布フレンドリー性能を持っていることを考えれば

一般人からすれば十分大金だろう。

他の作業員も近づいてきて

「いやあ助かったよ」とか「全く便利な機械だな」とかいう言葉をロランにかけていく

一方で護衛の軍の部隊はいつ帝国が来襲するかと今まで緊張していたのが

作業が終わってほっと一息ついている。

と、皆思い思いに休んでいると軍の車が走ってきて

「ほ、報告します！帝国軍が北方より襲来！戦車を含む部隊がブルールを攻撃していま

す！

至急増援を！」

と例の士官に報告した

「な、こんなに早くか！」

狼狽する士官 全大戦時よりもはるかに機動力を増した帝国に

旧態依然たるガリア軍は戦術ドクトリンでついていけないのだろう。くだした結論は

「総員、トラックに乗車！速やかに予備の防衛陣地へと転進する。」

「ま、待つてください！ブルールの町に援軍は無いんですか！」

「相手は戦車を含む部隊だ。歩兵だけで突っ込んで勝てるわけがない！

兵力を無駄に損耗するわけにはいかんのだ。」

確かに戦術的には正しいだろう、この護衛部隊に戦車はない。

それというのもただでさえ少ない戦車は（上層部の引っぱり合いで）

貴族が率いる正規軍にバラバラに配備され

平民の護衛などやっつけられるかと温存されてしまっているのだ。

こんなガリアが国家の体をなしているのかと問われれば

正直かなり疑問である。

「ブルールの街ヴィシニティみたい戦争に巻き込まれるなんて……

すみません、後始末は頼みます！」

そう言つてホワイトドールに飛び乗り走つていくロラン。

「戦争なんて……ホワイトドール、また力を貸してくれ。」

だが、ブルールへと到着したロランが見たものは

破壊されたシンボルの風車

瓦礫が散乱する美しかった街並み

そして道道に散乱する人だったもの……

帝国は思わぬ反撃でも食らって一時撤退して行ったのだろうか

死者も破壊された戦車も放置して姿が見えない……

大慌てで無人のギョンター家に飛び込むロラン

目に付いたのは床に倒れている帝国兵の屍

思わぬ客に動揺を隠せない

(どうしよう、お嬢さんもマーサさんも逃げてくれてたらいいけど……)

だが、テーブルの上のメモに目がとまる、読んでみると

『ロランさんへ』

私とマーサさんは兄さんと一緒に町から避難して

首都のランドグリーズへ疎開します。

この戦争に優しいロランさんは関係ありません

はやく外国へ避難してください。

お元気で』

手紙を見たロランは

(そんな……関係ないなんて……そんなことありませんよ)

思い出すのはかつて参加した戦争

月と地球、女王ディアナとギンガナム

ただ不毛で悲しいだけだった戦争

(僕は身勝手で、エゴイストで我侷です。

何も変わらないかもしれない、悪くなるだけかもしれない。

でも助けられるかもしれない人を見捨てて逃げるなんてやつぱりできません。)

家の外へ出てホワイトドールに乗り込むと

「お前が僕に何をさせたいのか、まだわからない。

だから僕がしたいことをやってもらおう。

この家でまたイサラお嬢さんがまた安心して眠れるように……」

ホワイトドールは歩き始める、ランドグリーズへと……

第3話 おひげと第7小隊

ホワイトドールは歩き始める、ランドグリーズへと・・・
ランドグリーズに向けて歩き出すロラン。

家からは思い出の品々を文字通り胸にしまって・・・

「そっか、ホワイトドールで引越しもすればよかったな。」

あれ以上仕事する気だったんだらうか？

しかしここで重大なことに気づく

「ね、眠い・・・」

そうこのロラン、朝から橋の解体作業にそこから走ってブルーへ

さらに目の当たりにする戦争の爪痕、自分の居場所がなくなったシヨック

現金・イサラのアルバムや貴重品を大慌てで詰め込んだ疲れから

(戦車には全てのり切らなかつたらしい)

とつても眠くなつてしまったのだ。

車もMSも宇宙戦艦も睡眠不足での運転は飲酒運転と同じくらい危険だぞ！

脳波コントロールのMSはパイロットの疲れをもろに反映するのか

ホワイトドールもフラフラと酔っ払いのようになる

オートパイロットはこわれてんのか？

オートでも脳波でもない車のドライバ―経験者のロランは思い切つて

「よし寝よう」

という決断をする。

しかし帝国が侵攻している状況下で寝ようとは肝が太い、線は細いが。

流石は惑星間戦争を戦い抜いただけはある。

道を外れた森の中に入りホワイトドールを横たえて自分もコックピットチェアを

リクライニングにして眠るロラン。

そこにひっそりと近づくと銃を構えた人影・・・

・・・・・・

対人センサー警報が鳴るとロランは飛び起きた。

流石に敵地となった場所で無警戒では無かつたらしい。

「け、警報？人？」

慌ててホワイトドールを立ち上がらせると相手は啞然とする

「巨人・・・」

これが後に第7小隊のスナイパーウルフと呼ばれるマリーナ・ウルフスタインとの口

ランとの出会いだった。

.....

「すみません、驚かせちゃって」

「いや私の方こそすまなかつた」

一人はコックピット、一人は手のひらの上で数少ない会話を交わす二人。

ロランとマリーナだ。

あの後お互いに敵ではないことを確認した二人はお互いの目的地が共に

ランドグリーズであることを知り、マリーナがロランを道案内することと引き換えに

乗せてもらっていたのだ、ホワイトドールの手の上に。

「よく考えたら僕、ランドグリーズへの行き方よく知らなかつたんですよ。」

一ヶ月程度しかガリアにいないロランには土地勘がない

まあいくら土地勘がなくともどこかの風の魔装機神の奏者のように

地球を何周することも無かつたらうが。

「しかしこのホワイトドールとかいう機械人形は早いな。

もうランドグリーズに着くぞ。」

そうこうしているうちにランドグリーズの市街が見えてくる

遠目にも疎開してきた避難民でござった返しているのがわかるくらいだ。

.....

「では、私はこれから義勇軍に志願してくる。

お前の言っていたイサラさん、アリシアさんに出会えたら

お前が探していたことを伝えておくぞ。」

「はい、お願いします。僕もしばらく探しておきますので。」

そう言つて別れる二人、再開は予想以上に早かつたのだが今の時点では知る由もない。

.....

「はあ、と言つても人探しなんてここじゃどうすりゃいいんだろ。」

盛大に溜息をつくロラン

避難民で街は混乱し人探しどころじゃないのは明らかだ

おまけに絶対防衛線だったはずの河を越えて西岸にまで帝国軍がもう進出しているというのだ。

ロランももう少し遅れていたら東岸に取り残されていただろう

.....まあホワイトドールなら飛んで渡れたかもしれないが

今は飛行ユニットが回復しきつていないのか使えないのだ

仕方なしに掲示板に探し人『イサラ・ギユンター』『アリシア・メルキオット』の張り紙を張るが探し人が多すぎて探せそうにない。

仕方なしに2・3日はボランティアで

避難民の炊き出し・仮設住宅設営・洗濯などを手伝っていた
ホワイトドールで

炊き出しのシチューかき混ぜなら指一本で

仮設住宅も物資運搬から組み立てまでこなす指先の器用さで

洗濯はお約束の『洗濯出動です!』でこなすホワイトドール
目立ちまくりである。

もつとも大抵の人からは便利な機械くらいにしか見られてないが。

ある軍人曰く「あんなに背が高くちや狙われ放題だろ、戦場じゃ使いもんにならん」
確かに戦略核やコロニーレーザーすら防ぐイーフィールドを装備していなければ常識
的な評価だろう。

余談だが完全体ターンエーはSTM Cと戦う某ガンでバスターなロボットや

時空を歪ませて攻撃する某グランでゾーンな闇色の魔人に

MSサイズで対抗しようというコンセプトで作られたという噂が・・・

みんな縮退炉搭載だしね。強すぎだろアホか。

せめてシズでラーにしとけ、そいつも十分強すぎだろ。
スパロボかよ。

.....

数日後、ロランは川へ洗濯出動していると丁度西岸の敵を追い返し帰還する義勇軍の中からマリリーナさんがやってきました。

「ロラン、イサラに会ったぞ。」

ロランは大変喜びましたが、イサラお嬢さんにあつてびつくりしました。

そう、イサラお嬢さんは戦車兵になっていたので。

「イサラお嬢さんがそんな戦争にいくなんていけませんよ！」

と、ロランが言うと

「いいえ、ロランさん。私はもう『お嬢さん』じゃありません

イサラ伍長です、それに兄さんと一緒に戦うことが今私にできること。

ロランさんはもう、私のことを忘れてください。

忘れてどこか遠くで幸せになってください」

「いいえ、お嬢さんは僕にとつては今でもお嬢さんですよ。

お嬢さんを忘れてどこかにいくなんて僕にはできません。

どうしても軍隊にいるというのなら僕も一緒に志願します。」

ああ、なんとという美しい情景。

はたから見たら完全に甘々な恋人同士の会話です、ロマンスです

甘いメロドラマのせいで砂糖吐き出しそうです

こういう風にしてソシエお嬢さんもデアナ様も落としたのですね

この天然ジゴロは

こういう会話をしていると

「やあ君がロランだね、僕はウエルキン・ギユンター。」

君とホワイトドールのことはよくイサラが手紙に書いてたよ。

ふうんこいつがホワイトドールか……

想像以上に……」

そう言つて考え込むウエルキン少尉

「え、何か？（この人ホワイトドールやモビルスーツについて何か知ってる？）」

「いや、想像以上に立派なお髭だなあと思つて。本当にすごいよ」

なんだかアリシア軍曹がずっこけた気がします、きつと気のせいです。

「はあウエルキン、ホワイトドールのおひげがそんなに重要？」

「そうとも！こんな立派なおひげはめつたに見られないからね。

まるでガリアヒゲナガヤギだよ。」

そうかあ、機械も人間や動物の特徴を持たせることでより愛着が湧くんだろうね。」
そういつてなんだか勝手に納得するウエルキン少尉。

天才となんとかは紙一重と言いますがきつところ・・・じゃなくて前者でしょう。
スージーもイーディーもいつのまにか来て

「あら、ロランさん。おひさしぶりです。白ヒゲさんもお変わりないようで。」とか
「へえ、こちらが噂の白ヒゲさんですか？ふーん、確かにそこいらのガリア貴族では及び
もつかないご立派なおひげね。」

とコメントを残していく。この国の人間はひげになにか愛着でもあるのか？

・・・

かくしてロランは駐屯地に帰還する第7小隊についていきその足で・・・

いや、この場合は流石に自分の足で志願し、第7小隊のロラン・セアックとして登録
された。

ホワイトドール？

作業機械扱いだよ。洗濯とか工事とか整備とかの

文明や地形や人の心までは洗濯とか工事とか整備はしないだろう・・・多分

第4話 おひげと橋

第4話

僕が義勇軍に志願することになることになったんだけど

その時に色々あったから書き残しておこうと思う

まずは中隊のバーロット大尉、

メガネが特徴の知的美人。

どんな人かは知ってる人は知ってるし省く

知らない人はゲームすればわかるよ SteamでWindows対応のHD版販

売してるし

「それでロラン・セアックと聞いたか。アメリカ出身・・・」

随分とまあ遠いところから来たものだが、なぜ義勇軍に志願を？」

今は義勇軍に入隊する面接中

このヨーロッパじゃアメリカなんて異世界も同然だし

アメリカで1年前にあった月との戦争なんてSF同然なので僕は

「はい、お世話になった人がいるのですが。」

その人がお兄さんを追って義勇軍に入隊したので
恩を返したくて入隊しました。」

バーロット大尉は『ああ、そういうことね』ってわかったような顔をしてたけど……
「それで何か特技は……やはりあれか？アメリカの作業機械だと聞いたが」

あれ、つまりホワイトドールだ……

「はい、アメリカにいた頃は自動車ドライバ―や飛行機パイロット、
機械技師を、自警団ではホワイトドールを使っていました。」

「随分と器用なんだな。だが、悪いがこの国にはまだ飛行機械はないぞ。」

飛行機械……デアアナカウンターのヴォドムのまえでは玩具同然だったけど
このヨーロッパではまだ発明されたばかりみたいで、

逆の意味で珍しい玩具ではないらしい。

あれば敵地の偵察とかに使えるんだろうけど……
でもヨーロッパには強力な戦車があるから兵器の技術は

アメリカよりヨーロッパの方が発展してるかもしれない。

このままでいけばそんなに遠くない将来、ヨーロッパでも
ボルジャーノンみたいなモバイルスーツが発明されるのかも……

「そうだな、さしあたっては支援兵として整備や

後方支援任務にでもついてもらおうと思うが

なにか希望はあるか？」

「はい、自分は義勇軍第7小隊を希望します！」

「ほう、何故だ？ お前とホワイトドール程の支援能力があれば

工兵隊や整備班でも引つ張りだこだと思うが……」

(ここがふんばりどころだ……どうしてもイサラお嬢さんの近くにいたくちや)

「はい、自分のホワイトドールは構造が特殊なため定期的なメンテナンスが

必要なのですがガリアではそのメンテナンスが出来る人物は

自分がお世話になったイサラ・ギンスターさんしかおりませんので。」

嘘じゃないよ、ホワイトドールのナノスキンの滓取りと一緒にしたのは

ガリアではイサラお嬢さんだけだしね。

「なるほど、整備の問題か。それでは仕方あるまいな。

ロラン・セアック。新隊員として義勇軍第7小隊への配属を命ずる。

指示は追って小隊長より受領するように。」

「はい、ありがとうございます！」

そういつて部屋を出るとふうと肩の荷を降ろす

ああ、軍隊式ってこんなに肩がこるもんだな。

するとイサラお嬢さんが

「ロランさん、どうでしたか？」

と聞いてくれたので僕は

「大丈夫でしたよ、同じ第7小隊です。」

と答えたらお嬢さんは困ったように

「なんで、志願なんかしたんですかロランさん。」

だつてこの戦争はあなたには関係（関係なくなんかありませんよ！）」

僕はお嬢さんを遮って答える

「こんな人の命をなんとも思わない戦争、確かに嫌ですよ。

でも一番嫌なのはそんな戦争で僕の大切な人が傷ついたり死ぬことなんです。

だから僕は戦います。ガリア人だからとか帝国だからとかじゃなくて

人の命を大事にしない人とは、僕は誰とでも戦います！」

「ロランさん……」

わかりました、それにもう同じ小隊の仲間ですしね。

よろしくお願いしますよ、ロラン二等兵」

「こちらこそ、よろしくお願いします！イサラ伍長！」

そういつて互いに敬礼する僕たち。

イサラお嬢さんはにこつと笑って帰ってきてそれがとっても可愛かったんだ。

・・・あれ僕って二等兵?・・・新入りだもんね。

それから僕はイサラお嬢さんと一緒に整備班のクラウスさんとリオンさんに挨拶に行っただ。

どんな人たちか?ゲームしてくれればわかるよ

僕のホワイトドールの整備に協力してくれる人たちで自称ガリア一の発明家

「オーライ オーライ そっちのトラックはエンジンオーバーホール

この戦車はギアボックスの点検だ。」

「はああああ、正規軍の連中は戦車に対する愛が無いっすよ。

これなんか砲塔外さなきゃいけないじゃないっすかあ。」

い、忙しそうだなあ・・・

「あのーすみません」

「何?今、忙しいんっすけど・・・ってロランさん!?白ひげのロランさんっすか!」

「ええ、ロランさんだっけ?まじかよ本物?ああああ!白!白ひげ!本物だあ!感動!」

な、なんか凄いいリアクションだなあ・・・

「あの、僕のことご存知ですか?」

「そりやもう!新聞でもガリア機械週報でも取り上げられた白ひげっすからね!」

「噂のアメリカの最新モデルの作業機械！機械を扱うものにとつちやまさに白い彗星！」

圧倒されるなあ……

「二本足で歩き、様々な作業をこなす！これがどれだけ凄まじい技術力を要求することか！俺たちプロにはわかるんつすよ。」

「二足歩行なんて、全くアメリカの技術力はとんでもないよ。偉い人にはそこがわからないんだよ」

え、えーと どうすればいいんだろう……

するとイサラさんが助け舟を出してくれた

「クラウスさん、リオンさん。ロランさんはこの度第7小隊に配属されることになりました。ホワイトドールもエーデルワイス共々これからよろしくお願いします。」

「アイエエエエ！」

なんか二人とも奇声発してるけど……大丈夫かなあ……

「まじつすか！いやあエーデルワイスに触れられるだけでも

超ラッキーだと思つてたらホワイトドールまで！

こりやいいことありすぎて後が怖いつすよ！」

「それにしても『高貴な白』を駆るイサラさんに『白い人形』使いのロランさんかあ

お二人とも白つながりでお似合いですね。」

「え、そ そんなお似合いだなんて……」

顔を赤めるイサラお嬢さん。

そつかあお嬢さんの戦車も『白』なんだな。

そして僕はお嬢さんの『エーデルワイス』にも挨拶する

「へえ、お嬢さんが戦車を持ってたなんて……」

「エーデルワイス、前の大戦で私の父が作りましたがコストの面で

一両しか作られなかったんです。」

戦車について誇らしげに説明してくれるイサラお嬢さん。

例え兵器でもお父さんの残してくれたものはやっぱり自慢したいんだろう

「ヨーロツパーの『白』ですよ。アメリカ一の『白』さん」

「ふふ、アメリカ一の『ひげ』もヨーロツパーの『花』には負けまずよ。」

そういつて笑いあう二人の元に詰め寄るのは……

……

赤みがかかった茶髪の女性、ロージーが詰め寄る

「おい、そこのお前、女の方だよ。お前はダルクス人だな」

見るからに不機嫌そうな女の人がやってきてイサラお嬢さんに詰め寄ってきたんだ
一体なんなんだろう？

「なんでこの部隊にダルクス人が紛れ込んでいるんだ？」

ダルクス人がいるからどうしたっていうんでしょか

「あの一すみません」

「なんだよ銀髪の坊や。あんたもダルクス人じゃないんなら疫病神と一緒にいたらひどい目にあうよ？」

その言葉にイサラお嬢さんが泣きそうな顔をするのを見て僕は怒り出す

「なんなんですかあなたは！突然他人に詰め寄って、疫病神扱いして！」

あなたも軍人なんでしょう！義勇軍の兵士なんでしょう！

それなら人に対する礼儀つてものを心得てるべきでしょう！

義勇軍つて祖国を守るために立ち上がったもつと立派な人たちの集まりじゃなかったんですか！

思いもかけない反撃に詰まるロージ

だが彼女のダルクス嫌いはこの程度では止まらない

「なんなんだよ てめえ！ダルクス人でもないのにダルクスをかばおうつてのかよ！」

そういつて彼女は僕の胸ぐらをつかむ でも引けない

こういう自分の身勝手に人を傷つける連中

ギンガナムやグエン様のような相手には引けないんだ！

たとえ戦つてでも！

「やめないか！」

するとウエルキン小隊長が走つてくると、ロージーさんは僕の胸ぐらを話した

「こつちの方の小娘だよ！ダルクス人がいるなんてふざけやがって！」

こんな不吉で油臭せえ奴らと戦えるか！こいつらは何もしない疫病神なんだよ！

それにこの銀髪の小僧までダルクスの肩を持ちやがって！」

するとおじさん ラルゴさんが

「隊長さんよお、俺達はダルクス人と一緒になんざ戦えねえんだよ。

それに実践経験のないボウズの言葉になんか誰も聞きやしねえよ」

実戦経験はともかくダルクスは関係ないでしょう！

僕は反論しようとするがイサラお嬢さんが袖をつかんで制止してくれた

正直のところ実戦経験なら僕はここの大抵の人よりも積んでるだろう

ヴィシニテイから始まったディアナカウンターとの地球での戦い

ギンガナム艦隊との宇宙での戦い

そしてギンガナムとターンXの地球での決戦

あんなものをたくさん経験してるから偉いなんていうなら、そんなのはギンガナムと同じだ！

食ってかかろうとする僕

マリアさんもスージーさんもイーディーさんも止めようとするけど・・・

「待ってくれみんな！」

するとウエルキンさんが間に入り込んだんだ

「僕の指揮がそんなに信用できないのなら賭けをしよう」

ウエルキンさんは笑いながら

「48時間以内に橋を奪還する。それが出来なければ隊長を辞退する」

「そのかわり作戦が成功したら以後は僕の指示に従うこと、それでロランくんもいいかい？」

ラルゴさんも呆れたように笑い出して

「おい、今の言葉・・・二言はねえな？」

「もちろん」

だつて。む、無茶ですよ・・・

・・・

その後、僕はウエルキンさん、アリシアお嬢さんと会話をしたんだけど……
「ウエ……しよ、少尉。48時間以内に橋を奪還って……可能なんですか？」

ここらへんの説明はゲームをやってもらえれば詳しくわかるから省くけど

ヴァーゼル市に唯一残ったヴァーゼル橋の奪還に正規軍が失敗したから
義勇軍がやれ、ということらしい。

火力も装甲も正規軍に劣る義勇軍で成功する可能性があるなんて

素人の僕でも思わない。

するとウエルキンさんは説明してくれたんだ

川の一部に植生してる植物を観察してわかったけど水深が浅い場所がある

そこならイサラお嬢さんの戦車、エーデルワイスでもオプションをつければ渡れるつ
て

僕は感心したけど、いままで試したことはと聞くと

「うーん、正直いままでやったことが無いからねえ。だから賭けなんだよ。」

ふ、不安だ……

僕はホワイトドールで何かできないかと思った

でも僕のホワイトドールは高すぎて奇襲には向かないし

装甲も戦車に比べるとずっと劣るから使えないそうだ。

正直、いまのホワイトドールのバリアがどの程度の出力なのかは撃たれてみないとわからないし、僕もそんな賭けはしたくない。

そこで僕はホワイトドールでイサラお嬢さんの戦車の改修を手伝うことにした。改修は思ったより大変で隙間にゴムパッキンを新しくはめなきゃならないし、シュノーケルは思ったより大きくて取り付けに苦労しそうだった。

ホワイトドール無しじゃ改修に時間がかかって

48時間以内というウエルキンさんの約束はかなりギリギリになったと思う。

こんなんで橋の奪回なんてできるのかなあ・・・

僕は不安でいっぱいだった

第5話 おひげと春の嵐

晴れない朝もやの中、僕たち義勇軍第7小隊は配置についた。

僕は今回ホワイトドールで川向こうの帝国の動きを観測していた。

渡った先に敵の部隊が哨戒してましたじや

奇襲の効果も薄れるからホワイトドールの対人生体センサーで

川向こうに人がいないかどうか調べさせてもらうよう提案したら

ウエルキンさんは思いの外喜んで受け入れてくれた。

無線封鎖してるから今は使えないけどイサラお嬢さんのエーデルワイスと

周波数を合わせたからいつでも連絡が取れるようになったから

偵察任務にはびつたりだつて喜んでたんだ。

「ウエルキン少尉！

川向こうの上陸地点から500m以上、敵の歩哨が離れました！

これなら上陸した時には察知されません！

また敵兵の会話をを傍受しました

『一時間ごとの歩哨なんてやっつてられねえよ……』

これじゃ哨所に戻っても一服したら終わりだぜ。』

今までの観測結果と合わせて次の歩哨が哨所を出発し

上陸地点に回ってくるまでおよそ50分と推定されます!」

「了解!よし!これより第7小隊はヴァーゼル河を渡り

橋の制御室を奪取する!」

そういつてウエルキン少尉は戦車のハッチを閉めエーデルワイスを河へと進める……

僕はお嬢さんたちの幸運を祈るしかなかった……

……

それにしても大したものだな、ロラン君は……

僕、ウエルキン・ギンターは戦車の中、みんなには見せられない不安な顔を

見られないという一時の安心感の中そう思う。

相手の行動パターンを観察し

歩哨の交代のタイミングを読みきつての渡河指示は見事なものだ。

それにこの指先も霞む朝もやのなかであのホワイトドールは少なくとも500m先の人間の挙動を探知していたことになる……どう考えても並みじゃない。

アメリカで自警団にいたとは聞いていたが

僕ら以上に実戦慣れしている戦士のような気がするよ。

・
・
・
・

初めての渡河装備、それも実戦

正直不安材料だらけだったけど兄さんにはわからないなんて言えなかった。でももう不安は感じない。

整備の人にも手伝ってもらったけど、正直ロランさんとホワイトドールの助けがなければかなりの水漏れがあつて当然だと思つた。

でも彼らの助けがあつて今のエーデルワイスは文字通り水も漏らさない気密を実現している。

今なら出来る！ロランさんと兄さんの期待に応えてみせる！

・
・
・

第7小隊が対岸に上陸したのをセンサーが捉える。

1、2、3・・・よし！全員いるな！

お嬢さんの戦車はどうかとしばらく不安になつてたけどやがて大きな熱源反応が出たのを確認してほつとする。

ここから先はスピード勝負だ、僕は無線を予定通り最小出力指向性最大にしてビーム状にするとウエルキン少尉に報告する。

「少尉、こちらはロラン！」

現在、そちらの帝国軍にまだ動きはありません。
動きがあり次第知らせます。」

「了解、引き続き偵察支援を頼む！」

ホワイトドールのセンサーならこの朝霞の中でも

対岸の建物の中で居眠りしたりタバコを一服している帝国兵の挙動すらわかる。
正確に敵味方双方の位置がわかる。

ガリア軍の上層部はまだ気づいてないけどこれは大変なことだ。

何しろ条件さえあえばこちらから一方的に

敵を攻撃することすら可能なのだから。

僕は改めてターナーを戦争に使うことの危険性を感じた。

「直接戦闘に参加しなくてもこれだから・・・」

僕はセンサーから流れ込む情報をウエルキン少尉に伝えていく。

「少尉、まもなく敵歩哨2名がそちらに近づきます。」

やりすぎすか、気づかれないうちに撃破してください。」

わかっている、実際やりすぎすなんてできないし

撃破っていうのはつまり殺すことだ。

戦争なんだってわかってても僕は自分の指示で生身の人が死ぬのは嫌だった。

でもイサラお嬢さんや第7小隊のみんなが傷つくことなく戦争を終えるにはこれしかないって納得するしかなかった。

・
・
・

「全く、これじゃどつちが隊長かわからないな・・・」

僕は苦笑しながら呟く。

実際に戦争嫌いと聞いていたロラン君だが

その指示は的確で僕は小隊員に指示を出してとつくに位置がわかっている

敵を少し迂回して音も出させずに倒す。

熟練の特殊部隊員でもなかなかできない行動。

でも相手の位置や数、注意している方向がわかりきっているのなら話は別だ。

そうやって僕たちは当初の予想よりもはるかに早く橋の制御室の前の

帝国の陣地にたどり着いた。

敵に気付かれることもなく・・・新兵揃いだということを考えれば奇跡的だろう。

「敵の総数は歩兵30人。戦車5両。敵兵は全周囲を警戒しています。これでは今までのように迂回して奇襲はできません。」

「了解した。ではこれから当初の予定通り強襲ということになるね。

イサラ、徹甲弾を装填。停車している戦車3両を連続撃破。

歩兵隊は指示のあった敵兵を一斉射撃で撃破後

突撃兵が制御室に突入し制御盤を確保。

対戦車兵は残りの戦車を撃破後は迫撃弾で制圧射撃を開始。

・・・一斉射撃まで後5・4・3・2・1・今！」

小隊員全員での一斉射撃。

エーデルワイスの82mmで柔らかい横腹をえぐられた中戦車の砲塔が派手に吹き飛ぶ。

警戒しつつもこちらに敵はこないと油断しきっていた敵兵は

一斉射撃で頭を撃ち抜かれるもの

心臓をえぐられるもの

腕を吹き飛ばされるものと一気に半数が戦闘不能になる。

接収した民家から敵の指揮官が慌てて飛び出してくる・・・ロランの情報通りだ。全く

ホワイトドールの千里眼は恐ろしいね。

マリーナの正確な射撃が待ち受けているとも知らずに

無防備に飛び出してきた指揮官の脳髓が壁に派手にかかり

敵部隊はどうしようもない混乱に見舞われる。

予想された敵の反撃は最初の5秒で消し飛んだ。

後は橋を稼働させてガリア側の敵を袋の鼠にするだけ……

だったんだけど世の中万事うまくいくとは限らないんだよねえ……

……

「に、兄さん！燃料が！橋の稼働に必要なラグナイト燃料が抜かれています！」

イサラの悲痛な叫びが響く

「な、なんだって！」

燃料がない、僕はなんて間抜けだったんだろう。

ヴァーゼル橋は帝国に占領されてたんだ。

船が通ることなんて相手は考えてなかったろうし

戦時下で貴重な燃料を占領下からかき集めることくらい十分考えられたんだ。そう

しているうちにもロラン君から報告が上がる。

「隊長！ガリア側の帝国軍に動きあり！戦車を中心とした部隊が反転！」

そちらに向かっています！」

これは……まずいな、敵の動きが早い。

エーデルワイスや敵の車両から燃料を抜いて入れるにしても時間がかかる……

下手すれば全滅だぞ・・・

今のうちに上陸地点まで戻って戦車を放棄してでも撤退すべきか・・・
するとロラン君から連絡が入る

「少尉！今からそちらに3分で向かいます！3分だけ持ちこたえてください！」

「3分？しかし君は対岸に・・・」

「すみません、正確な情報収集のため。」

少尉が上陸した後、にそちらに僕も上陸しました。

もうそちらに向かっています。」

そういうとホワイトドールが凄い速度でこちらに駆け抜けてくるのが見える。

3分よりずっと早いな！

「ホワイトドールを起重機の代わりにします！1分でもいいので援護してください！」

「つ！わかった！総員！橋を渡る敵に集中射撃！1分持ち堪えろ！」

・・・

ホワイトドールを橋の帝国側の方に寄せると僕はスピーカーで叫ぶ

「橋のロックを解除したら皆さんは下がって！」

ホワイトドールで橋を持ち上げます！」

そうやって橋を掴み、地面に踏んばって僕はホワイトドールで押しあげる

「あがれえええー！」

橋は何十トンもありそうな巨大なものだったけどホワイトドールのパワーで無理やり押し上げたんだ！

対岸から銃弾がかんかん当たってるけどそんなものは御構い無しにあげきるとロツクがかかる。

こうやって“春の嵐作戦”は首の皮一枚で成功したんだ・・・
つ、つかれた・・・

次回予告

春の嵐作戦は成功した

約束通りみんなウエルキン少尉の

言うことを聞いてくれるってことになったんだけど

一致団結には未だ遠そうだ

そんな中活躍した第7小隊の取材にエレット記者がやってきた

なんだかフランを思い出すなあ

僕はこの機会に他の第7小隊のメンバーについても知っておこうと思ったんだけど・・・

次回 おひげと新聞
第7小隊に優しい風が吹く

第6話 おひげと新聞

作戦終了後

第7小隊では負傷者は少数でたもののみんな軽傷だった。

けれどもガリア側の戦闘では他の小隊に少なからず死者が出てたんだ。

これは戦争で一方的に死者の出ない戦争なんてないんだってことは

アメリカでの戦争でもわかってたことなのに……

戦闘後、残敵を掃討し捕虜を後送していく義勇軍。

僕がすっかり疲れ切ってホワイトドールの足元で休んでいると

他の小隊の隊長さんが話しかけてきた。

「よっ！ ああ、そのまま楽にしてくれ。ウエルキンから話は聞いてる、大活躍だったんだって。俺はファルディオ・ランツアート、第一小隊の隊長だ。」

「ロラン・セアック二等兵です。ウエルキン隊長とお知り合いなんですな。」

「大学の同期だね、変人だろ？ まあ俺もそこが気に入ってるんだがね。」

するとファルディオ少尉はホワイトドールを見上げて……

「へえこいつが噂の白ヒゲか……」

「どうかしましたか？」

「ダルクスの伝説では．．．いや、関係ないな。忘れてくれ。」

「え、でもガリアのお話なら興味がありますよ。」

「すまん、この話は迂闊に人には言えないんだ。」

また今度な。」

迂闊に言えない伝説．．．やつぱりターンエーと黒歴史

宇宙世紀の人類最後の戦争アーマゲドンに関することなんだろうか？

ガリアで昔何があっただらうか？

そんな様子を見ていたロージー・ラルゴであつたが．．．

ラルゴは

「なんて奴だ、本当に戦車で川を渡っちまうなんてよ．．．」

ロージーは

「ここまで上手くいくとはね．．．正直驚いたよ。」

とつぶやいていた

「でも一番驚いたのは．．．」

とホワイトドールを見上げる

「アメリカの白ヒゲ．．．どこまで規格外なんだろうね、こいつは。」

ロージは制御室に取り付いたメンバーの一人であったからわかるのだが
目前まで時速にして100kmを軽く越す速度で走ってきて

勢いもそのままに橋を軽々と持ち上げたのだ。

普通、可動橋とは据付の強力なモーターで

時間をかけてゆっくり持ち上がるもので

勢い良く上がるものではないはずなのだが．．．

「全く、この白ヒゲと力くらべだけはしたくないもんだな．．．」

とラルゴも変な方向に同意する。

するとアリシアが

「あなたたち！約束通り、ウエルキンを隊長と認めなさいよね！」

ラルゴもロージも渋々認めるが

ダルクス人のことまでは認めないらしい．．．

そんなイサラに

「大丈夫ですよ、イサラお嬢さん。」

ローランは言う

「ここに来たばかりで右も左もわかんなかった僕を

お嬢さんは信じてくれました。同じ国に生まれて同じところで生活してる

お嬢さんとあの人たちが分かり合えない道理なんてありませんよ。」

(そう、ムーンレイスと地球人のように……)

ロランは去っていくロージーとラルゴの背中を見て思う……

(そっか、ロージーさんってなんとなくテテスさんに雰囲気似てるんだ……)

ロランは赤毛の不幸なムーンレイスの女性を思い出す。

(だとしたら……あの人も個人的にダルクス関係で嫌なことがあったのかも……)

そう言って

「イサラお嬢さん、アリシアお嬢さん。第7小隊のメンバーについて教えてくれませんか?」

すると両名共えっ?という顔を見せる。

「いや、僕って新入りだからまだ小隊の人たちに自己紹介も済ませてなくて……」

アリシアもはっと気づく

「そういや、入隊していきなりこの作戦だったからロランと話してない人もいたっけ。わかった!じゃあせつかくだから紹介したげるわ!」

すると突然フラッシュ音が焚かれ、シャッター音が聞こえた

「ハーイ!お取込み中失礼!私GBS記者のエレット!」

カメラを片手にした金髪のメガネの女性が話しかけてきた。

「あなたが『白ヒゲ』のロラン・セアック君ね。お噂はかねがね聞いてるわ。

ギンター隊長の次はあなたにインタビューしたいけど

ちよつとお時間いいかしら？」

「はい、構いませんよ。それにしても新聞記者かあ・・・」

「？新聞記者が何か？」

「あ、僕の同郷の人も都会で新聞記者してるんです。」

「あら、じゃあこの手のインタビューもお手の物かしら？」

「じゃ、まずは・・・」

エレットさんは分厚い手帳のページからメモを取り出す・・・

メモは質問でびっしりと・・・って！そんなに質問するんですか！

「そりやもう！謎の『白ひげ』を駆る銀髪の美少年！

今やランドグリーズ中の話題よ！独占インタビューでGBSも大喜びよ！」

そういつて食いいるように質問をぶつけてくるエレットさん・・・

お、お嬢さん助けてくださいよー

「え、えーとロラン。それじゃあたしたち作戦成功のお祝い準備があるから・・・」

「ロランさん、インタビュ・・・が、頑張ってください！」

そんな〜！

「つ、つかれた・・・」

疲れた後にインタビューを受けた僕はすっかりクタクタになってようやく隊舎に戻ってきた。するとアリシアお嬢さんが

「お帰りロラン！お祝いの用意ならもう出来てるよ。」

僕の前には隊舎のホールで『Welcome to 7th Platoon』
という垂れ幕の下、料理や飲み物が用意されていた。

ウエルキン少尉も

「バーロット大尉に許可をもらってね。

無茶な作戦だったけど君のおかげで成功したようなもんだから特別に。」

既に皆んな思い思いに交流してるようだ。

なんだかごついのにお姉さんっぽいヤンさんは

「歓迎するわ、ロランちゃん。う〜ん髪サラッサラ、うらやましいわ〜

ホント可愛いわね〜」

に、苦手だ・・・

スージーお嬢さんは

「ロランさん、ブルールではうちの自動車の面倒をよく見てくださいましたね。」

第7小隊でも今後ともよろしくお願い致します。」

うん、スージーさんはブルールにいた頃からのお得意さんだったからよく知ってるよ。

マリーナさんからは

「よく来たな、歓迎するぞ。」

うん、この人が無口だったのはよく知ってる。でもとってもいい人だ。

ホーマーさんは

「やあ、ロラン君。同じ支援兵としてこれから一緒に頑張っていこう。」

へえ、僕のポジションって支援兵だったんだ。

やっぱホワイトドールで支援したからかな？

ゲーム的にはオーダー発動とイベント出動だったけど。

くれぐれも月光蝶で支援はしないようにしないと。

アイシャちゃんは

「よくきたな〜ロラン、だい7しよ〜りたいじゃアイシャが

せんぱいだからな！よろしくたのむぞ！」

はい、こちらこそお願いします……ってちっちゃ！いいのかな……

リインさんは

「よろしくお願ひします。アメリカのことも聞かせてくださいね。」

この人もイサラお嬢さんと同じダルクス人なんだな。

イーデーさんは

「よろしくお願ひしますわね、この前はちゃんと挨拶できなかつたから

改めてイーデー・ネルソンですわ、『お洗濯の白ひげ』さん」

お、お洗濯・・・やっぱそういうイメージですか。

こんな感じで他の小隊の隊員と挨拶して回つただけ・・・

「あ、ロージーさん。」

「ああ、お前か・・・確かに賭けには負けたがな、ダルクスまで認める気は無いよ」

「賭けや命令で無理やり認めさせたって誰も喜ばないでしょう。」

大丈夫です！きつと僕とイサラお嬢さんたちとでロージーさんの考えを変えてみせ

ます！」

「どうだかな・・・」

「それと・・・なにかダルクス人関係で嫌なことがあつたんですか？」

「っ！な、何言つてやが！」

「ごめんなさい！気に障つたんなら謝ります。」

でもアメリカで同じような人に僕は会ったんです。」

僕はテテスさんのことを月からのことは伏せて母方の先祖が異邦人だから差別されて育つてその異邦人の女王を暗殺しようとしたという感じに話した。

「その人は結局、復讐に囚われて周りのことが見えなかったんです。

彼女のことを助けよう、一緒に頑張つていこうという人はいたのに……」

「それで、アタイも同じだつていいのかい？」

「いえ、そういうわけじゃ……」

「だったら話は終りだ。アタイはそんな奴みたいになる気はさらさらないよ。」

そういつて背を向けるロージーさん……でも話、聞いてくれたじゃないですか。

「いよう坊主！」

今度はラルゴさんが話しかけてきた。

「まったくたいしたもんだよ見直したぜ！最初のは……」

ああ、まあ悪かったな。これからよろしくな！」

「はい！よろしくお願ひします！」

なんだ、結構皆んなわかってくれるじゃないか……

そんな風にして宴会で夜は更けていく。

ギルランダ才要塞

その一室にて……

「ヴァーゼル橋が、ガリアの犬どもに奪われた？防衛部隊には腑抜けしかおらんのか？」
ベルホルト・グレゴール將軍……帝国の指揮官の一人だ。「皇帝陛下の威光を汚しておつて、役立たずどもめ！」

怒り心頭のようなだ。

「戦車である川を渡つたらしいな……敵さんもなかなか面白い戦法を使う。」

ラディ・イエーガー將軍。

「定石では考えられん野蛮な戦法だ。所詮は下賤な民兵の寄せ集め……偶然にすぎん。」

「身分で戦争に勝てんなら……あんたらもよつほど楽だつたろうになあ……」

「むう……」

流石にグレゴール將軍も有能な指揮官、負けは負けだとわかっている。

「それに妙な機械のことも聞いた」

「妙な機械？」

「なんでも高さ20mはある白い機械の人形で時速50kmを超える速度で走り

上がる筈のないヴァーゼル橋を無理やりもちあげたそうだ。」

「その報告ならこちらでも受け取っている。ふん、所詮は作業機械。」

そんな頭の高い機械など戦場ではいい的になるだけ……役に立ちません。」

だが、將軍の顔は苦々しい。

実際に機械人形がなければ橋が奪還されることはなかったであろうことをわかつているのだ。

すると銀髪の女性 セルベリア・ブレス大佐が

「問題は反抗しようとしているガリア軍をいかにして押し戻すかだ。」

イエーガー將軍も

「そうだな。連中もこれを好機に中部に戦力を集中してくるだろう。」

と同意する。

「殿下、いかががいたしましょう？」

・・・

「燎原の火は、消さねばなるまい。小さな火の内にな」

マクシミリアン皇太子・・・帝国軍のガリア方面侵攻軍総司令官だ。

そう言うのと戦略地図を見渡し

「フレゴールは引き続き北部ガリアへの侵攻を進めよ。」

イエーガー將軍には

「クローデンからの補給路を盤石にする必要がある。クローデン補給基地の防衛と補給線の意地を命ずる。いそぎ出発せよ。」

「ああ、任せておけ」

軽く返すイエーガー將軍、だが眼光は鋭い。

「余はバリアス砂漠に向かう、セルベリアは共をせよ。」

「喜んで。」

こうして盤面は動いた。小さな小さな盤面。

なぜたかが一つの小さな惑星 地球の表面の

小さなヨーロッパのそのまた小さなガリア程度を巡って人は争うのか。

争うのは人の宿命なのか、何を思つて黒歴史が示すニュータイプ達は

外宇宙に旅立つて行ったのか、この醜い戦争を見ればわかるではないか。

彼らがこのオールドタイプ達を見たら何を思うだろうか……

その頃ロランは……

「アリシアお嬢さん。この菓子パン、とっても美味しいですよ。」

「ロランさん。このアイスクリーム、私の直した機械で作ったんですよ。」

「アイスなんて……うわあ凄い！さらさらしてすつと舌の上で溶けて……

これ凄い美味しいですよ！」

とつても宴を満喫していた。

BGM 軍靴の記憶

宴会も終わって 新たに結束を深めた第7小隊

そこにクローデンの森の帝国軍補給基地の破壊命令が下る

こういうのって正規軍の役目じゃないのかなあ・・・

ところが敵の防衛部隊はイエーガー將軍率いる精鋭部隊で義勇軍は大苦戦

そこで僕はターンエーである行動に打って出たんだけど・・・

次回 おひげと森

クローデンの森に烈風が巻き起こる

第7話 おひげと森

木々は緑深く、空は青く澄み渡る。

「ウエルキン少尉、ガリアってとつてもいいところですね。」

「ロラン君もそう思ってくれるかい？このクローデンの森は生態系が豊富でね、ガリアの天然記念物としても指定されてるんだ。」

「こないいいところで、なんで戦争なんかしなくちやならないんでしょうか・・・」

ロランはそう思う、不毛な月に比べれば地球はとても暖かくて過ごしやすく豊かだ。

人は争わなくても生きていけるのに・・・

ヴァーゼル橋を奪還した結果、帝国軍に打撃を与えガリア軍の戦線は上昇、中部戦線が最前線となった。

その前線は正規軍が奪還作戦を開始しており、義勇軍は正規軍の援護に回ることになった。

クローデンの森の中にある補給基地制圧のため正規軍が攻撃したところ、反撃に合い

壊滅的被害を被った。

指揮を取っていたのは例によってダモンだ。

正直、またもや前線指揮をとらせた上層部の正気を疑う。

結果上層部は戦果を挙げる義勇軍にこの任務を付与した。

だが森林戦で火力の劣る民兵にすぎない義勇軍は敵の防衛戦の前に前進できず釘付けになっていた。

そこで敵の側面をつくるルートを探索するため第7小隊がこうして斥候中なのだ。

「けど、こう森林が濃いと方向感覚が狂いそうですね。」

「上から見てどうですか？何か見つかりませんか？」

イサラがエーデルワイスから話しかける。大柄な戦車の視界は狭くそもそも森林戦には向いていないのだ。

ロランのホワイトドールも20mの高さを生かしてカメラをあちらこちらに向けるが森林は広大で木々が熱も視界も遮るためセンサーもなかなか目標を見つけられない。

自然環境に溶け込んだ陣地作りをすることでいるのならこの指揮官の腕前は見事としか言いようがない。

MSとて万能ではないのだ。

すると、ウエルキン隊長も出てきて休憩するよう指示をだしたんだけど。

皆が一息ついている所、ウエルキン隊長は地面に注視しながら何かをさがしたんだ
「どうしたの、ウエルキン？」

それを不思議に思ったのか、アリシアさんが声をかけると

「……あつたぞ！」

何かを見つけたか、それをアリシアさんに見せて渡す。

その手の平には小さく黒い丸い物体があつた

「なにこれ？」

尋ねると

「クローデンヒゲナガヤギのフンだよ」

探しながら答えるが、アリシアさんはキャツとフンを投げ捨て、怒り出しちゃった。

隊長……女の人にフンを渡すのってどうなんですか

「隊長、フンがどうかしましたか」

そう尋ねると

「そう、動物のフンがあるということは……」

指さすとそこにはかすかだが草が倒れた場所が続いていた。

「獣道だよ、獣達は移動に適したコースを探し出してそこを通り道にする。道ができる
ぐらいの獣が行く先は水場や餌場などがあるんだ」

「へえ、なるほど。そうか動物の生態を観察してこういうこともできるんだな。」

僕は素直に感心した、周囲の地形や知識を活用して答えを出すなんて地球の人たちは本当に素晴らしい知識を持つてる。

「動物が通るということは水源も近くにあるから、この近くに補給基地がある可能性が高い。全員気を引き締めて……」

喋っている途中で突然茂みがガサガサと音をたて動いた。

皆が茂みへと銃を向けるとそこに居たのは羽の生えた子ブタだった。

ブタ・・・農場・・・ホワイトドール・・・なんだろう、すごく懐かしいや。

「きみ。どうしたの？お母さんとはぐれちゃったの？」

アリシヤお嬢さんが、羽ブタを抱きかかえる

マリーナさんが森の奥を見てくると戻って来た

「森の奥にブタの死骸が・・・こいつの親だろう。流れ弾に当たったらしい。」

そう報告するとアリシヤお嬢さんは哀しそうに羽ブタの頭を撫でた

「きみも家族がいなくなっちゃったの？ひとりぼっち？」

すると隊長が

「アリシヤ、一緒にその子連れ来てくかい？」

隊長、やさしいなあ。するとアリシヤお嬢さんも驚いたけど

「良かったね！今日からきみも第7小隊の仲間だよ」

自分のことのようにアリシアお嬢さんが喜ぶと、羽ブタも鳴き声を上げた。その鳴き声は先程のにくらべ嬉しそうだった。

僕たち第7小隊はようやく敵の補給基地を発見した。

けど、前面には地雷や大砲が設置されていて支援兵が排除しようとする

機関銃が邪魔をするせいで身動きが取れなくなってしまった。

「くそー隊長さんよおー敵の基地を発見したはいいが向こうの戦力はこっちの倍以上はあるんじゃないか？」

戦車に対戦車槍を発射して突破口を開こうとするラルゴさん。

でも、敵は戦車を地面の防御陣地に据え付けてるせいでなかなか破壊できない。

対岸からは大砲が絶え間なく砲撃してくるせいで突撃兵のイーデーさんやロージーさんも土囊に隠れたままで身動きが取れない。

「くっ！嫌になる程分厚い防御陣地だね・・・ここは迂回するしかないが・・・」

そう簡単に言っても迂回するにはまず敵の防御陣地からの砲撃をやめさせないと誰も身動きができない・・・

「僕が行きます！少尉はここで敵に牽制射撃をお願いします。」

「だがロラン君！君のホワイトドールじゃ砲撃が直撃したらもたないぞ！」

「当たらなければ、どうということはありません！ロラン・セアック、行きます！」

そう言うって僕はホワイトドールを森の中の弾薬集積場所から飛び出させた。

突然飛び出してきたMSにびっくりして帝国兵が射撃してくるけど

僕はホワイトドールの回避パターンを前進しつつオートで回避に設定する。

「Iフィールドの出力を駆動に集中セット、オートリアクションで砲弾を回避。」

接近させまいと砲撃する帝国軍の大砲だがその砲弾をホワイトドールはセンサーで感知し最適な行動で回避しつつ大砲に接近する。

「よし、これで……その帝国兵！そこをどけ！今からこいつを破壊する！」

僕はホワイトドールに大砲の砲身をつかませると振り回して湖に投げ込んだ。

こんな綺麗なところでこんな戦争の道具を使っちゃいけないだ。

大砲が壊されると帝国軍は及び腰になったのか

義勇軍の射撃の前にじりじりと後退していく。

そこに隊長はアリシアさんをはじめとする義勇兵の面々を迂回させて帝国軍を背後から強襲した。

挟み撃ちにあつた帝国軍は後退するかと思われたが……

「隊長！戦車だ！新車の大型が接近！」

第7小隊のみんなはこのタイミングで現れた戦車に驚き、物陰に隠れるラルゴさんとヤンさんが対戦車槍を構えて撃つ

「往生せいや〜!」

だけど、新型重戦車の装甲は恐ろしく分厚くことごとく攻撃をはじき返してしまう。そして砲撃音が響くと、砲弾は真つ直ぐ飛んでいき。

イサラお嬢さんのエーデルワイス号に直撃した。車内が激しく揺れてイサラお嬢さんの悲鳴が聞こえる。

「お嬢さん!今行きます!」

「損害報告!」

ウエルキン隊長が急いで状況を確認していく

「正面装甲中破!更に今の攻撃で出力に異常が発生!機動力低下!」

イサラが状況報告をしていると驚いた表情になった、一撃でエーデルワイス号の装甲を破壊された上に駆動系統をやられてしまったのだ。

「う、動けません!もう一度攻撃されたら持ちません!兄さん!」

イサラの悲鳴のような報告が届く、大ピンチだ

「おいおい、今のは完全にアウトだったろ。全く大した戦車だな。

だが次でゲームセットだ。これで!」

イエーガー將軍はそう眩くと徹甲弾を込めて再度エーデルワイスに照準する

今のエーデルワイスでは回避できず同じ箇所直撃を食らったら撃破は免れない

僕はホワイトドールを全力で走らせてエーデルワイスの前に飛び出させる

「ロランさん！危ない！」

イサラお嬢さんが悲鳴をあげるけど、ごめんなさい！でもどけないんです！

「あいつ！例の白ひげってやつか。仲間をかばうとは見上げたもんだが……こつちも仕事なんですね、悪く思うなよ！」

そういつてヴォルフ戦車から放たれる砲弾を僕は

「Iフィールド全開！お嬢さんはやらせません！」

Iフィールドを全開にして受け止めようとしたんだ。

「な！光で砲弾を受け止めただあ！?!おいおい芸達者にも程があるだろ白ひげさんよお」

呆然とするイエーガー、だがその隙に肉薄した対戦車兵の攻撃でラジエーターを損傷し……

「ありやりやりやりや、こりや潮時だな。全軍に撤退命令を出せ。

武器弾薬の撤収も忘れるなよ、一目散に逃げ出したと思われたら癩だからな。」

そういつて戦車を後退させると同時に敵の歩兵隊も撤退していく。

次々と補給トラックが基地から撤退していくが義勇軍には追撃するだけの機動力も

火力もなかった。

結果、敵の基地を破壊することには成功した。

けれども正規軍の甚大な損害、他の義勇軍の死傷者の事も考えれば

勝利とは言い難かったらしいんだ。

また気が重くなるなあ・・・

「なあにしけた顔してんだよ、ロラン！」

ほんと僕の背を叩くロージーさん

「本当ですよ、ロランさんのおかげでまた助かったんですからそんな落ち込まないでください。」

スージーお嬢さんも慰めてくれる。

「全く、キミには苦勞ばかりかけるよね・・・だが本当にありがとう。」

僕からもイサラからお礼するよ。」

「ロランさん、本当にありがとうございました。あんな風にかばってくれてなんて・・・でも、もう無茶しちやいけませんよ」

こうやって僕たちは基地へと帰還する道中で今回のことについていろいろ話し合っ

た。中でも僕がエーデルワイスをかばった事はみんなの間でも話題になり

「ホント、ロランちゃんはイサラちゃんのナイトね！もう、うらやましいっただらな
わあ。」

ってヤンさんにまでからかわれちゃった。

.....

一方第1小隊のファルディオ少尉は目撃したホワイトドールの光の壁について考え
ていた.....

(あの光・・・虹色の光・・・伝説にある月の蝶・・・天使とヴァルクリア人との戦い・・・
いやでも・・・そのうち確かめないとな・・・)

クローデンの森の補給を断つ事に成功した第7小隊

ところが成功する僕たちをうとましく思ったのか

司令部は今度はなにも無い砂漠の遺跡に行けって言うんだ

でも僕は興味を持った 古代の遺跡なら

黒歴史に封印されたターンエーについての何かを得られるかもしれない。

次回 おひげと砂漠

砂漠に蒼の風が吹く